

公共空間の魅力づくり

- 1 日本都市の公共空間の特質を考える
- 2 活動の場としての公共空間の魅力づくり
- 3 憩いの場としての公共空間の魅力づくり
- 4 集う場としての公共空間の魅力づくり

担当：金澤成保、中村伸之、宮前保子*

公共空間を不特定多数の人々が自由に利用できる空間であって、土地の所有とは別に公開空地、民間マンションの共有空間なども含めた概念と位置付け、公共空間の魅力づくりについて、考察した。1990年代の公共空間の利用については、澤木が、公共空間利用実態調査（2000～2002）を実施し、公共空間利用の課題、次の時代への萌芽や可能性について整理している。また、2000年以降は、市民参画の時代、規制緩和の時代などの時代背景を整理して、単体の公共空間の整備からエリアマネジメントの時代に入ってきた。こうした時代背景を踏まえて、今後、公共空間の魅力づくりに対してJUDI関西の専門家の役割を展望する。

1. 日本都市の公共空間の特質を考える

公共空間は、集住体としての都市、さらに都市空間の中核をなすとともに、その都市のアーバンティを生み出す源でもある。単に通行や輸送のための空間であるだけでなく、日常的には、人々の触れあいや社会的なコミュニケーションの場であり、非日常的には、儀式、祭礼、娯楽などの行事の舞台となる。行き交う人々に、商品やファッション、行事、芸術、政治など、多様で日々更新されるメッセージを送りつづける。現代社会が、情報ネットワーク社会、「ユビキタス社会」へと移行するにつれ、主要な公共空間は「情報のコアスペース」になるだろう。そこでは人々が必要とする情報をいつでも自由に受信し発信できることになる。

「西洋には広場があり、日本には道があった」との表現があるように、日本の道空間は、人々の生活にとって上に述べたような多様な空間的役割と意味を持っていたが、今日、車利用が支配的になるにつれ、その多くが失われてきた。日本の道空間が、欧米の道空間と最も異なるのは、公共領域の空間的定義が一般的に曖昧であること、言い換えれば、公共領域へ“私的性”が滲み出し、侵そうとすることであり、古くは行商人、露天、市、現代でいえば看板や広告、自動販売機がその例である。こうした傾向は、日本の都市に限らず、中国や韓国などのアジアの都市に広く見られる。今日、京都に見られる狭い道路網は、古代都城制に基づいて築かれた広幅員の道空間を何百年もかけて「私有化」してきた結果である。

こうした「私的性」の表出が、日本の都市景観を特徴づけている。時とともにたやすく変貌し、

商売や都会の人々の個々の欲望や表現を視覚化しているため、日本の道空間は、そこを行き交う人々に視覚的刺激を与えつづけ、時には混乱していて醜いといった印象をもたらすと同時に、活気や活力、可変的である印象、言い換えればダイナミズムを感じさせつづけている。これに対し、欧米都市の道空間は、公共空間と私的空間の区分が明瞭で、秩序があつて、堅く、静的であるのが一般的であるといえる。

現代日本の都市、とくに大都市を特徴づけるもう一つの特色は、公共空間の“内部化”と“立体化”といえる。イタリアのポルティコの機能を果たす覆われた歩道空間は、日本の伝統的都市の中にも見られるが、現代の日本都市が用いてきた公共空間のデザインでとくに卓越しているのは、ミラノのガレリア、パリのパッサージュのようにアーケード、ガラスの屋根で商店街を覆う手法であった。こうした歩行者のための屋外公共空間の建築的内部化は、多くの場合、その商店街が衰退しつつあることから、見直しを迫られている。公共空間の立体化は、今日、とくに大都市に見られる。大規模商業コンプレックスには、上層階へ誘うエスカレーターが備えられたオープンモールやアトリウムが、建物内部に創られている。こうした上方への立体化は世界的に見られるが、“地下街”、地下のショッピングモールの特筆すべき発展は、東京や大阪などの日本都市を特徴付けるユニークな特色といえるだろう。地下世界は、古代の死者の世界であったが、今日、日本の市民にとっては賑やかで、世俗的で物欲的な空間に変わった。

都市は、単に都市機能の集合であるだけではない。都市は、その社会が創りだしてきた意味（価値）を様々な次元で視覚的に表現したものともしえる。したがって、都市やその部分の意味の体系を正確に把握することが、必要であり重要であると考えられる。

公共空間は、都市の骨格的空間をなすことから、都市プランナーやデザイナーは、公共空間あるいは、それに接してプロジェクトを実現しようとする時は、その場所の意味の組織化、簡単に言えば「場所性」に十分な配慮を払うべきといえる。

都市の計画、デザインに関わる専門家の間では、公共空間はゲシュタルト心理学の「図と地の理論」でいうところの“図”であるべきで、慎ましい、あまり目立たない外見であるべきだとの考え方が、受け入れられている。

しかし環境心理学で得られた知見では、望ましい、あるいは美しい環境には、秩序があつて分かりやすいことが求められるが、一方で、新規性、驚き、不思議さ、そして複雑さといった正反対の特質が、同時に求められている。

こうした研究成果は、公共空間のデザインが、そのプロジェクトの特質によれば、“図”としてのデザインだけよりも、はるかに広い概念でデザインを模索することができることを示唆しているといえる。

(JUDI 事例)

公共空間利用実態調査 (2000 ~ 2002)

2. 活動の場としての公共空間の魅力づくり

(1) 公的空間を市民が生き生きとした活動の場とする試み

河川、公園などパブリックスペースに市民が積極的に関わり、多様な活動の場と仕立て上げるこ

とによって魅力をつくりだしてきた。今後は、こうした活動を持続させるための**実践的デザイン検討やワークショップ**などの手法を活用したシステムづくりが求められている。

20世紀の後半、わが国は都市インフラの圧倒的な不足を補うべく、住宅・社会資本の量的な充足にまい進し、都市の経済的発展を支えてきた。

住宅・社会資本の基本的な水準が満たされた現在、その飽和状態ともいべき事態となり「無駄な公共事業」が批判されるに至ったが、それらの大半は画一的で最小限の品質の整備であった。

急激な成長に対応するため、その土地に合ったオリジナルな解を思考する時間がなく、整備の結果を確かめつつ次の整備を構想するような漸進的なまちづくりができなかった。計画プロセスの中で地域住民の意見を聞く余裕もなかった。その結果、美しくもなければ快適でもない、誰のもでもない（愛着や共有感に乏しい）満足感の少ない都市環境が残った。

もはや、量的な拡大だけではユーザーの満足感は得られない。画一的な基準では対応できない地域性、ニーズの多様化、ライフスタイルや価値観の変化に対応した都市環境の質的な向上。つまり「クオリティ・オブ・ライフ」や「しあわせ」を追求しなければならない。

そのような要請によって、都市環境整備の計画段階に実践的デザイン検討やワークショップが取り入れられるようになった。これは2000年前後に各地で起こった転換である。

愛着（共有感）を感じさせるオーダーメイドのまちづくりデザイン、さらには地域住民が参加する維持管理やリニューアルを視野に入れたきめ細かなマネジメントへの転換であり、人々の居場所や生き生きとした活動の場を提供することにつながる。

（参考文献）『平成10年版 建設白書 - 次世代に向けて -』建設省

（JUDI事例）

東横堀川：川を活かしたまちづくり

名塩創造の森

北大江公園リニューアルパーク／公園を拠点としたまちづくり活動

VRを活用した4町パティオのデザイン

御坊市営島団地の再生

（2）コモンズ（共的空間）の再生への試み

ため池、里山などは、歴史的には土地所有が共有されていたが、現代では土地所有に関わらず**コモンズ（共的空間）**として、その機能を再生させようとする動きがある。住宅団地の共有スペースなども含めて**共空間の現代的な意義**について整理する。

OECD世界価値観調査（2005）によると、私たちは社会的孤立感が世界一高い「生きづらい社会」に住んでいることになる。

この孤立感は、1998年以降3万人以上の自殺者が出ていることと無関係ではないだろう。私たちが住むのは「集団が向かって閉じているムラ社会」集団から離脱した者には生きづらい社会」なのである。小学校では子どもたちがグループ外の子どもをいじめ、グループから追放されることに怯えている。街角では見知らぬ者同士が声をかけたり笑顔を交わしたりすることはほとんどない。町並みでは個々の建物がバラバラに孤立し、調和のない醜悪な景観になって表れる。

近世の京都には、日本の都市では例外的に城壁（お土居）があった。通りを中心とした両側町が数十軒の町内を形成しその入り口は木戸門で守られていた。町式目には町内の不動産売買、業種の規制、建築の決まりなどについて定められたルールブックであった。通りには共同の井戸があり、各家が門掃きや水まきをして通りを管理していた。これは日本的な都市型commonsの原型の一つと言える。他の多くの都市でも同様に通りはcommonsであったが、クルマの往来によって失われていった。

1960年代、身近であったはずの通りを外部からのクルマが通り抜けるようになり、その変化に対応できない老人や子どもたちが多く事故にあった。その対策として京都市内に450ヶ所ほどのちびっこ広場が設けられた（2005年には262ヶ所）。ちびっこ広場はかつて「通り」が担っていたcommonsの性格を継承したと言えるが、子ども人口の減少に応じて、その役割も小さくなっている。

ヨーロッパや中国の都市コミュニティは、城壁都市の性格を継承し、防衛上の運命共同体の一体感のあるメンタリティが醸成されていると言われている。日本では都市レベルの城壁をもたない代わりに血縁レベルでの垣根が作られる。血縁関係の団結が社会からの防波堤を築いていたわけだが、核家族化し、親世代も経済的ゆとりを失って漂流する個へと溶け出している。

秋葉原無差別殺傷事件（2008）は、派遣先の職場コミュニティからもネット上のコミュニティからも疎外され孤立した若者が、歩行者天国と言う擬似的なcommonsをクルマで襲撃した事件であった。そのような孤立感は広く社会に潜在しているため、事件の衝撃は大きかった。

孤立した（自立した）個と個が連帯する都市型のコミュニティと、その中心となり交流の場となるcommonsが求められている。それが安定した社会の基盤となる。

現代のコミュニティの中心としては、学校、福祉・医療施設、自然、商店街、神社が挙げられる。高齢人口が増えるに従い、福祉・医療施設の比重が高くなることが予想される。

テーマ型コミュニティ（NPOなど）やネットコミュニティなどの場所に拘束されないコミュニティが隆盛を極めている中、地域コミュニティに関わるこの意味はどこにあるのだろうか。

ため池や里山や市場などのcommonsは持続的に共有の富を生む場である。それゆえそこにはタブーが生まれ神が宿る。規範意識や財産管理意識が不可欠なのである。身近な場所の価値を高め守り育てることで、共有感が増し、地域コミュニティの格が高まり、自らの居場所ができるのである。もてあまし気味の空間を安く管理したいという消極的な動機ではcommonsは生まれない。

地域コミュニティの一員であるためには、ただ単にそこに住んでいればいいのではなく、一種の資格がいる。commonsの管理やそこでの行事（祭り）に参加することで、コミュニティの一員として認められる。

地域コミュニティ再生の成否は、まさに身近で参加を実感できるcommonsを持ちうるかにかかっている。commonsの現代的な意義はこのあたりにある。

（参考文献）『コミュニティを問いなおす - つながり・都市・日本社会の未来』 広井良典

「加古川・寺田池」のように、農業用水は農村の富を生む源泉であり、ため池では古くからcommonsとしての共同管理が発達していた。水利権は水利組合により厳密に管理されていた。

今日、ため池には、利水だけでは捉えられない環境・歴史・景観としての価値が見出されるようになった。ため池の整備保全協議会は町内会、水利委員、語る会、行政など幅広いステークホルダー

が参加している。

ため池コモンズを共有するために、次のようなプロセスがとられた。

1) 価値の再確認と共有

「寺田池の(水生)生物」「寺田池その歴史と体験を語る」「寺田池周辺の景観について」

2) 活用の方向性の共有

「寺田池でこんなことをしたい」「寺田池を感じてみよう」「わたしが望む施設や設備」

3) 整備検討の場づくり

「水際デザイン専門部会」「遊歩道デザイン専門部会」「安全対策等専門部会」

新たなステークホルダーとの協働が始まり、それぞれの立場・視点からの意見表明と参加があった。コモンズの再発見と再生がエリアマネジメントに発展する。

「東豊中第一団地建替え緑地・検討ワークショップ」では、昔の団地の写真を持ち寄り、建設当時から40年間を振り返ることや、建替前の団地内を歩くことにより、緑やオープンスペースの問題点、大切さを再発見し、構想の目標や方向性のアイデアを出し合った。

もっとも大切にしていたどんぐり山の緑の保全・回復を考えるワークショップの開催要望が住民から出され、住民組織「どんぐり山を守り育てる会」が設立された。

緑にまつわる「共有の思い出」がコモンズの価値を高め、それを再生し継承する地域コミュニティが生まれた。

「中百舌公園団地・団地環境整備事業」は高密度な高層集合住宅に囲まれた広場と動線のリニューアルであり、高密度に利用が集中するがゆえに「空間の棲み分け」が重要な課題であった。

「引き算のデザイン」で過度な施設集中を改め、動線を広げ、長く親しまれたアキニレと古レンガの景観を拡張した。幼児や親たちの利用パターンを注意深く観察し、動線沿いにエッジに幼児が集まりグラウンドを掘り返して砂場化することから、自転車から守られた子どもたちの小さな居場所を設定した。

無秩序な利用が資源を枯渇させる「コモンズの悲劇」を避けるために、限られたオープンスペースでは「自分の居場所であり、みんなと分け合う場所」という棲み分けのデザインが求められる。

(JUDI事例)

地域ぐるみの「ため池」再生に向けて - 加古川寺田池

八幡山公園彫刻シンポジウム

東豊中第一団地建替え緑地・検討ワークショップ

中百舌公園団地・団地環境整備事業

3. 憩いの場としての公共空間の魅力づくり

都市の公共空間を不特定多数の人々が憩うことができる場とする仕事は、公共空間づくりのための最重点項目であるといっても過言ではない。

憩いの場としての公共空間の魅力づくりを、パブリック・アートと庭園の伝統的技法という2つ

の方向から検証した。

(1) 都市にアートを取り入れた公共空間の魅力づくり

アートによる公共空間の魅力づくりは、パブリック・アート運動として展開してきたが、その端緒は第二次大戦後のアメリカ合衆国からはじまり、やがてヨーロッパに広まり、日本には 1990 年前後に用語や概念が導入された。

高度経済成長期の 60 年代には、全国で彫刻のまちづくりが進められ、60 年の宇部市野外彫刻展、63 年の神戸市須磨離宮公園現代彫刻展、68 年の横浜市大通り公園への彫刻作品の設置など、多くの都市で展開した。

彫刻を街に設置することから一歩踏み出したのが、パブリック・アートによる公共空間の魅力づくりの活動である。代表事例として 1994 年のファーレ立川と谷中芸展があげられる。ファーレ立川は、立川基地跡地関連地区第一種市街地再開発事業に際して、新しい街にアート作品を設置したものであり、これを「市街地整備型」とする。谷中芸展は、東京の下町である谷中の街に点在するギャラリーやアーティストのアトリエ、筆や彫金などの地域の職人の店、路地や街角、民家の一室を開放した展示など、街のあらゆる場所が展覧会場となるイベント型の試みで現在も継続しており、これを「まちづくり型」とする。アートによる公共空間の魅力づくりに向けて、「市街地整備型」と「まちづくり型」の 2 つが全国で展開してきたのが 90 年代の特徴である。こうした動きは、2000 年から始まった越後妻有トリエンナーレや 1996 年の直島アートプロジェクトの一環であるサイト・スペシフィックワークなど、都市から地方への拡大もみせている。

関西では、1993 年から御堂筋の土佐堀通りから長堀通りまでの約 2km の区間に、歩道、企業敷地内に合計 26 体の彫刻を設置した「市街地整備型」がみられたが、2000 年以降には、泉北ニュータウンでアートを活用したまちづくりプロジェクトが（2004 年 11 月～2005 年 3 月）最近では門真市古川橋アートによる商店街再生プロジェクト（2009 年 10 月～2010 年 11 月）が社会実験として取り組まれるなど、「まちづくり型」が展開している。パブリック・アートは公共空間の魅力要素というよりも、芸術作品が設置されることで公共空間の心地良さや地域の特徴を再発見することができるまちづくりの一つの手法として認識されてきたといえる。

こうした一連の動きを進めるキーパーソンが浮かび上がってくる。それは、熱心な自治体担当者や CSR 活動の範疇を超えて取り組む企業の代表者、企画を実現しうるキュレーター、作品をつくりだすアーティスト、空間を総合的にプロデュースする都市環境デザイナー、そして都市で暮らし働く市民である。

JUDI 関西のメンバー関わった仕事は、パブリック・アートに関わる多様なステークホルダーやキーパーソンの意見を調整しながら、公共空間にアートという魅力をつくりだす「まちづくり型」が主体となっており、今後も都市環境デザイナーとして、コラボレーション能力が期待されていることがみえてくる。

(JUDI 事例)

OCAT の公共空間のデザイン

南芦屋浜コミュニティ・アート計画

八幡山公園彫刻シンポジウム

(2) 伝統的技法を駆使することによる都市における庭園づくり

日本の伝統的庭園は、囲われた私的空間であるが、その空間構成や技法は世界から注目されている。日本の伝統的庭園に対する評価のポイントは、「借景」、「縮景」などの景観の「生け捕り」や、回遊式庭園などにみられるシークエンスの展開、「曲水の宴」や「船遊び」などの風雅な遊びの場の提供などにあるといえる。

私的空間であった伝統的庭園を一般に開放したのは、徳川斉昭による偕楽園、池田家による後楽園など江戸末期から明治初期にかけて全国各地で進められ、明治6年には太政官布達によって公園となったものもみられる。この当時公園として開放された伝統的庭園は、「古来ノ勝区名人ノ旧跡地等是迄群集遊覧ノ場所」であった。その後、明治から大正、昭和初期にかけても多くの私的庭園がつくられたが、それらの庭園の維持が困難になって、京都市の山泉有朋邸であった無鄰菴などのように、文化財庭園として一般に開放されるようになったところもある。

明治から戦前にかけて歴史的な名園を開放してきた時期から戦後の高度成長期にかけて、新たにパブリックな日本庭園をつくりだす動きが各地で進められた。特に、各種博覧会の記念事業で整備された日本庭園も多い。関西では、1970年の大阪万博に造営された万博記念公園日本庭園が大規模なパブリックガーデンとして整備されたが、その後、名古屋では1989年開催された世界デザイン博覧会のパビリオン「日本庭園」として本格的に整備された白鳥庭園などがあげられる。

このように、歴史的な名園の開放や新しいパブリックガーデンの整備などの過程を経て、現在も都市の公共空間の魅力となっている大阪周辺の日本庭園をあげると、大阪城三の丸庭園、天王寺公園慶沢園、堺市大仙公園内日本庭園などが思い浮かぶ。1990年以降には、旧藤田邸跡復元整備庭園(2004)、和泉市久保惣美術館の庭など、施設に付随した日本庭園も整備されてきた。

日本庭園の整備と併せて、関西における新しい庭園的空間整備が進められたのも1990年代以降の傾向である。旧そごうおよび大丸心齋橋屋上庭園、なんばパークス庭園など、商業施設と一体となった庭園が整備されたが、これらの庭園はイングリッシュガーデン風、バラ庭園風などのいわゆる西洋風の庭園様式が主流になっている。そのなかで新梅田シティの空中庭園は庭園と命名されているものの、庭園の構成要素は空と眺望であり、伝統的な庭園の構成要素である植物も石材も含まれていない、新しい庭園の様式を示したものであった。

庭園は都市の「パラダイス」空間をつくりだし、喧噪や雑然とした環境から隔離されて、静寂と静謐を感じる空間になっている。

都市における公共空間の魅力づくりにとって、伝統的技法を駆使した庭園づくりの仕事は、美術館(万葉文化館)の庭園、伝統的建造物群保存地区内の広場づくり(東海道関宿の「百六里庭」)、港湾区域における庭園(ル・アール港日本庭園)などに広がっている。

伝統的技法を駆使しながら公的空間に新たな庭園をつくりだすことは都市文化の「余裕」を示すものとなり、バナキュラーな公共空間の魅力を創造してきた。こうした伝統的な技法を継承しつつ、新しい時代の要請に応えるデザインへと転化するため、『東海道関宿の「百六里庭」子供まちづくり教育』に見られるように、空間づくりだけでなく、その空間を活用して、こどもたちへのデザイン

教育の場とするプログラムも含めて進めていくことが今、求められている。

(JUDI 事例)

万葉文化館・庭園

ル・アール港日本庭園

東海道関宿「百六里庭」子供まちづくり教育)

阪急西宮ガーデンズ

4 . 集う場としての公共空間の魅力づくり

公共空間はアレントによれば、人々が都市を感じる場ともいえる。そこで出会い、刺激を受け、思考する。集う場としての公共空間を広場とプロムナード、パブリックパークに分けて、その魅力づくりへのアプローチを検証した。

(1) 広場・プロムナードの魅力づくり

都市の広場やプロムナードは人々が集い、集うことで新しい都市のシーンをつくりだしてきた。そうした集える場の魅力づくりはデザイナーの最も得意とする分野である。

前述したように、「西洋には広場があり、日本には道があった」時代から、80年代以降、都市に広場もプロムナードもつくる時代になってきたといえる。

1990年初版の「都市デザインの手法 - 魅力あるまちづくりへの展開」では、横浜開港広場(1986)、大阪の三津街園(通称三角公園)が紹介されており、90年代以降、日本でも都市に広場・プロムナードがつくられてきたといえる。

関西における都市環境デザインの仕事としては、集合住宅地の中庭、都心の広場、水辺のプロムナードの3つの事例が浮かび上がってきた。

集合住宅地では、旧住宅公団の時代から、日照と通風などを確保するために棟間に屋外空間が確保されてきたが、その形態は広場というよりも植栽地であった。しかし、千里ニュータウン内の囲み型住棟配置や、芦屋浜の高層住宅に囲まれた中庭など、緑の空間としての広場がつくられてきた。こうした集合住宅地の屋外空間を魅力ある集う場へとデザインする代表例として、「アルカディア21住宅街区」があげられる。

一方、都心では、土地の歴史や文脈を読み取った新しい広場空間がつくりだされている。氷川神社への参道をケヤキでつなぐ「さいたま新都心けやきひろば」、非公開であった毛利庭園の開放や「日本の農の風景」をテーマとしたけやき坂コンプレックス(TOHO シネマズ 六本木ヒルズ)の屋上などの広場系によって敷地の約25%の緑地空間を確保した「六本木ヒルズ・ランドスケープ」などである。

さらに、都市の水辺空間がプロムナードとして再生されてきたのも90年代以降の傾向である。都市環境デザイン会議関西ブロック有志が関わった「道頓堀水辺プロムナードの空間と橋のデザイン検討・監修」の仕事は、良くも悪くも大阪都心部を代表する空間であった道頓堀界隈の水辺空間を「ウラ」から「オモテ」に再生した仕事であったといえる。しかも、多くの個性的な都市環境デザイナーのコラボレーションによる新しいスタイルの仕事像をつくりだしたプロジェクトであるとい

える。加えて、大阪湾全体の海を人々が集う場にと再生を目指した「なぎさ海道整備イメージ検討」は広域的な水辺整備の必要性を提示したものである。

公共空間のクライアントは誰かということが、広場やプロムナードでは問われる。公共空間デザインの仕事に対する直接のクライアントは行政つまり公共機関であるが、真のクライアントは公共事業に対する税を負担している市民であるといわれる。

そのなかでクライアントのニーズをどのように把握するかは、ワークショップなどの直接参加による手法もあれば、アンケート調査などによる間接的な意向把握の手法もある。

しかし、都市の広場やプロムナードを魅力的につくりだすためには、何よりも、時代の変化を読み取り、クライアントのニーズを把握し、集う目的に応じた魅力づくりに力を発揮させる専門家が必要であり、今後ともJUDIメンバーは積極的に担っていく分野である。

(JUDI 事例)

アルカディア21住宅街区

さいたま新都心けやきひろば

六本木ヒルズ・ランドスケープ

大阪国際美術館

道頓堀水辺プロムナードの空間と橋のデザイン検討・監修

なぎさ海道整備イメージ検討

(2) パブリックパークの創造・再生

公園は、集う場としての公共空間機能を十分に発揮するため、公園とプロムナードの連携や市民のニーズに適合した再生などが必要とされている。公園が真の意味でのパブリックパークとして機能するため、これまでを振り返り、これからを展望する。

1) 施設 - 機能の側面から考える

公園と遊園地はどう違うのか？ 遊園地ではそれぞれの施設が「来園者を楽しませる - サービスの対価を支払う」という明快な機能を持っている。サービスはチケットで切り売りできるほどに定量化している。それに対して公園は来園者に対して計画的で安定したサービスを供給することは稀である。公園内の施設が担うサービスは多くの場合（計画意図にも関わらず）利用者の使い勝手にゆだねられ、あいまいである。

それゆえ公園には、使い勝手を探求する楽しさと、行き場のない人も受け入れる許容力があると言える。行き場がないとは、経済的な意味だけでなく、目的や機能に縛られずぼっとしたいという心境も含まれる。公園には、何もしなくていいという安心感や消費を強いられない自由があるが、当然、遊園地に比べて集客性・収益性は低い。

一方で、視野を広げれば、公園は過密な都市環境を緩和し、災害時には防災・減災の拠点となる機能を持った都市施設で、空地性の担保が最大の公共的な機能である。来園者の視点から見ると、空地性は「あいまいさ」とも「漠然とした安心感(安らぎ)」とも映るであろうし、計画者から見れば柔軟な土地利用の可能性に映るであろう。

そのような空地性が実は公園の基本的なあり様であると思うのだが、立地や時代の要請に応じて、

機能を特化した集客施設や収益施設あるいはコミュニティ施設が設けられる。

公園の中にも「不易」の部分と「流行」の部分があるのだと言える。

『北児童遊技場で遊んで、南児童遊技場まで徒歩で行き遊んで、高石児童遊技場まで歩いていき遊んで、交通遊園で遊んで、疲れたところ交通遊園の汽車で花壇広場前まで汽車に乗って北児童遊技場まで戻ると言う遊びでかなり満喫できると思います。最後に 浜寺公園の魅力は遊具がいっぱいあり、すぐ近くでバーベキューもできることです。夏場は徒歩池で水遊びもできますし、プールもあります。』（浜寺公園の感想。関西遊び場.com より）

この感想文から、浜寺公園のユーザーにとって交通遊園が重要な利用の拠点になっていることが分かる。また、浜寺公園が交通遊園の再整備などでファミリーユーザーのニーズに的確に応えている施設を充実させていること、広い面積（48.4ha）の公園においては、個々の施設の魅力もさることながら、施設間のネットワーク（あるいはユーザー自身による動線構造の読み解き）が重要であることが読み取れる。

『うつぼ公園（東園）の薔薇が満開になっていました。秋に見た時よりも、一面バラだらけで感動ものでした。』『ここほどサラリーマン、OL の似合う公園は無いと思います。沢山の人が、ここでお弁当を広げたり、お昼寝したりしています。』『丘の上から、山、里、田園、街、海へとテーマが分かれているようで、山はバラの原種～街は新種へと変化を楽しむ事ができます。でも、実際行ってみると、綺麗なバラに大興奮。どこが里で、どこが町なのかははっきりわかりませんでした。（笑）』『うつぼ公園周辺では、移動販売のお弁当が沢山売られています。恐る恐る買ってみました（400 円）、外で食べるお弁当は美味さ倍増でした。』（「ぎやるまま日記～ぎやるのままでいたいと願う（笑）主婦のブログ」より）

バラ園の量的な充実（それを活かす演出）と都心ならではの「食の充実」が読み取れる感想である。「まちとつなぐ」というリニューアルのコンセプトのように、人々が都市に求める「美」と「快」にストレートに結びつく公園のあり方ではないだろうか。背後には生産型（事務所ビル、銀行）から消費型（飲食、ファッションの店舗）へとシフトする都市の変容がうかがえる。

ニュータウンのオープンスペースでは公園・歩行者専用道路・商業施設・学校のネットワークが計画的に形成され、日常生活との結びつきが強い。特に田原台は南北に長いリニアな都市構造なので、幹線に利用・動線が集中し、オープンスペースの「集客性」が高くなっている。近隣公園内には地域の集会所設けられコミュニティ利用の相乗効果を目指している。

「集客」の目玉になるような施設整備がなされることで、公園の利用が活性化し、それを取り巻く地域の新陳代謝が活発になる。靱公園リニューアルの後、周辺にはおしゃれな飲食店や衣料店が次々に開店し、公園を借景としたアメニティ（快適性）を活用し、都市のイメージが大きく改善された。

公園の基本的な性格である空地性と新陳代謝する集客施設のバランス（不易と流行）、そして都市構造の中でのネットワーク形成。これらが公園の公共空間としての機能を高め、都市環境を創造する。

2) 場所性 - 象徴性の側面から考える

時代の要請に応じた新しい施設が新しい物語を生み出すこともあるが、その土地の底流に常に流れる「公園化以前」つまり「近代化以前」の物語はより魅力的で根強いものがある。

浜寺公園（48.4ha、府立総合公園）は万葉の時代から「高師の浜」と呼ばれる美しい松原の続く海岸であった。太政官布告（1873）により設置された「日本最古の公立公園」である。当時の浜寺町周辺は、白砂青松で有名な大阪近郊の行楽地であり別荘地であった。松の伐採に反対した大久保利通の和歌。与謝野晶子、中江兆民、幸徳秋水などが来訪したエピソード、日露戦争のロシア兵捕虜収容施設。大正期の鉄道資本による沿線住宅地開発・・・浜寺公園周辺は明治大正時代の富裕層や知識層の文化に彩られている。（南海本線・浜寺公園駅は、辰野金吾設計の木造平屋建ての洋風駅舎で、登録有形文化財である）

ここに郊外型住宅地を成立させた「集客力」の根源は白砂青松の風景である。今、海はコンピナートによって埋め立てられているが、浜寺公園には「21世紀に残したい日本の名松100選」に選定された約5,500本の松林があり、原風景を継承している。

大阪市の都心にある靱公園（1955年開園）も色濃い場所性を有している。靱（うつぼ）という地名は、江戸時代・大坂随一の魚市場、雑喉場魚市場（ざこぼうおいちば）および靱塩干魚市場であったことに由来し、豊臣秀吉が名づけたという説もある。海産物を全国から集めて300年以上繁盛を続けた魚市場は、昭和初期の移転により閉鎖され、跡地は大阪空襲により廃墟となった。その後、占領軍の常用飛行場となり、大阪市に返還され総合公園（9.7ha）として整備された。

公園の中央には永神社があり、クスノキの大木がランドマークになる。神社の横にはかつて海部堀川が流れていたが、今はない。このクスノキは靱市場の数少ない名残である。クスノキは戦後、飛行場建設の際に伐採されようとしたが、神の使いの白蛇にまつわる騒動から保存されることになった。

田原台は大阪と奈良の境界の丘陵地に立地している。貝原益軒は「此田原も其入口は岩舟のせびき山間を過て、其おくは頗るひろき谷なり、あたかも陶淵明が桃花源記にかけるがごとし」と記し、山間幽谷に開かれた平原地の地形と「田原」という地名を結び付けている。丘陵地を造成した田原台では、近隣公園にかつての里山の地形と緑が保全されている。また、造成時に多量に出土した花崗岩が石積みやモニュメントとして公園や歩行者専用道路の整備に活用されている。モニュメントは1990年に彫刻シンポジウムが開催された際に現地で制作されたものである。

地名の継承、白砂青松の風景を伝える松林、堀川や魚市場の名残である神社のクスノキ、里山地形や郷土色の濃い素材の活用。これら公園に刻印された場所性は、公園の「不易」性を高めるだけでなく、土地の来歴や都市の変遷を物語るパブリックヒストリーとなる。

画一化された都市空間、あるいは時代の感性を追うあまりに陳腐化する都市空間の中であって、公園がその土地の風土に根付く感覚は実に魅力的であり、パブリックパークの創造と再生は場所性の獲得と無縁ではない。

3) 創造と再生の展望

公園はその空地性・機能のあいまいさゆえに、新たな集客の仕掛けを自由に構想することができ、豊かな都市環境創造の可能性を秘めた公共空間である。不要になった部分をそぎ落とし、周辺地域

の変容や時代の要請に応じた施設更新やネットワーク形成が求められる。

一方で、都市の原風景や歴史の重層を語り伝え、鮮やかに再生させる場所でもある。年月を経た公園では樹木が大きく成長し、自然素材のエイジングで風格を増し、都市になじみ「風景」になる。新陳代謝を行いつつも、場所性を継承する「不易」の部分は守り続けなければならない。それは成長する緑の風景と深く結びつく。都市が成熟するにつれて、公園にも歴史に裏打ちされた風格がおよそと醸し出されるであろう。

日本の近代公園の開設から 140 年が過ぎようとしている。3 つの事例からわかる様に、公園は都市の拡大と言う時代の要請に応えながら創造と再生を繰り返してきた。それは社会的欲望の拡大の後始末に追われた姿のようにも見える。

人口減少期に入り、定常化社会への道筋を模索する時代となり、無制限な欲望は輝きを失い、「環境」や「景観」が社会的な規範として浸透しつつある。

都市は内的な深化を始め、アイデンティティを感じさせるローカルな多様性が追求されるだろう。公園では場所性・風土性を表出する「不易」の部分（場所固有の価値）が重視され、都市コミュニティの原風景となるような再生が求められるだろう。

（JUDI 事例）

浜寺公園交通遊園再整備計画 前期（1994-1996）

靱公園（東園）リニューアルパーク / まちとつなく 前期（1998-2002）

田原台の近隣公園と歩行者専用道路（計画・設計） 前期（1991-2000）